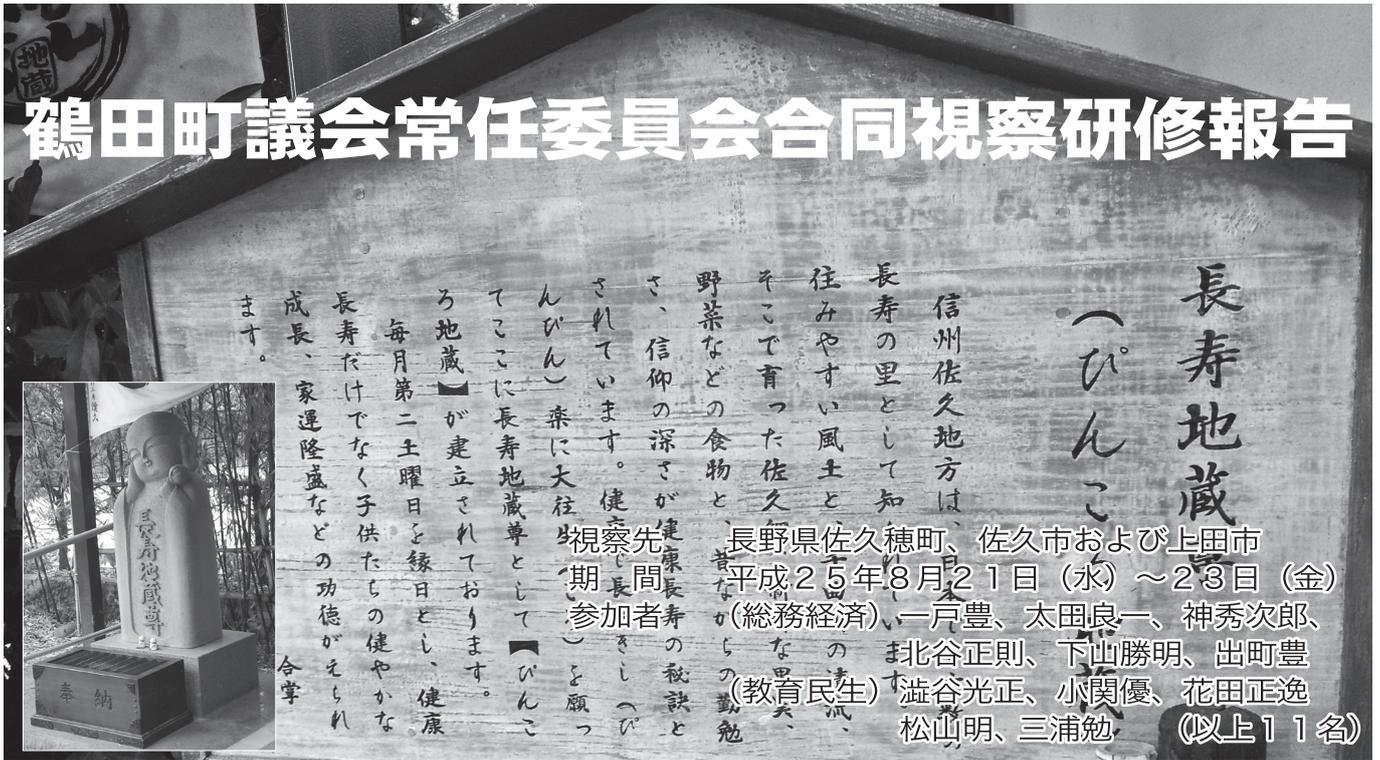


鶴田町議会常任委員会合同視察研修報告



長寿地藏

(びんころ)

信州佐久地方は

長寿の里として知

住みやさい風土と

そこで育った佐久

野菜などの食物と

さ、信仰の深さが健康

されていきます。健康

んびん) 森に大社

てここに長寿地藏尊として

ろ地藏」が建立されております。

毎月第二土曜日を録日とし、健康

長寿だけでなく子供たちの健やかな

成長、家運隆盛などの功德がえられ

ます。



△内枠写真は「びんころ地藏尊」

今年度の研修は、総務経済と教育民生の2つの常任委員会が合同で実施し、長野県佐久穂町で「健康長寿の取り組みについて」、佐久市において「びんころ地藏」、上田市で「ニプロ松山(株)農業機械製造工場」をそれぞれ視察および研修してきましたので、その概要についてご報告いたします。

(佐久穂町)

佐久穂町は、長野県の東部南佐久郡の北部に位置し北は佐久市、西は茅野市、東は群馬県南牧村と上野村、南は小海町と北相木村に接しています。

(取り組みと経緯)

平成17年3月20日に佐久町と八千穂村が合併して佐久穂町が誕生しております。

合併前の八千穂村は、昭和34年から全村健康管理活動(事業)が行われていました。これは、人口6千人の小さな村で、全住民を対象にした「集団健診」の始まりということを説明されました。

その経緯は、「貧しい農民の健康管理や病気の早期発見の重要性」を説いてきた佐久病院の

若月俊一先生と「国保の窓口支払制度によって貧しい農民は医者にかかれなくなる」と国保の窓口徴収制度に反対した当時の井出幸吉村長の二人が住民に呼びかけた活動が始まりました。

若月先生と井出村長の二人は、昭和32年の国民健康保険法の改正によって、これまで窓口で払わなくてもよかった医療費自己負担分が窓口徴収ということになり、現金収入のない貧しい農民が病院の受診を抑制することになれば、住民に「がまん型」の「潜在疾病」や「手遅れ」が増えることになってしまふ。病人をつくらぬように村を挙げて健康を守る運動に取り組みることが必要という考えからでした。そして、佐久病院の医師を始めとする医療機関の協力のもと「集団健診」が行われてきたということでした。

このことは、現在の長野県の長寿に結びついていると考えられます。病気によって手遅れの患者を減らすためには、病気を未然に防ぐことを健診によって早期予防、早期発見することが、まず大事だと感じました。

(取り組み内容と現在)

この全村健康管理の仕組みとしては、健康管理の二つの柱として、「健診を毎年受診して早



△佐久穂町役場会議室にて

期発見、早期治療」、「生活習慣の改善・環境づくり」を柱としており、健診は健康管理の重要な一部ではあるが、それとともに疾病の予防、健康増進のためには、住民自身が自分の健康を守ることを第一に、その根本である生活の改善を図るということでした。

また、健診の記録を保存するため、住民一人ひとりに健康手帳を作成(各自が管理)し、健康台帳を作成(村で管理)。この組み合わせを初めてつくったのも八千穂村ということでした。

また、「衛生指導員」を組織し、各種健診の啓発活動、健康検診、健診報告会の準備や事業の協力、健診結果の分析や保健衛生知識の学習などを行って、現在は「地域健康づくり員」と

名称を変更して、40〜50歳の男性26人が活動しているそうです。男性だけの健康推進の組織を構成していることには、驚きました。

健康管理事業を導入した結果、潜在疾病の減少、国保医療費の減少につながり、「予防は治療にまさる」を実証してきたということです。

その後、この健康管理事業、集団健診は、全国的に広まり、現在われわれが受診している集団健診がここから始まっているということでした。

この長野県から始まった「集団健診」は、NHKの『プロジエクトX 挑戦者たち』〜起死回生の突破口 医師たちは走った／医療革命 集団検診』という題名で放映されたということです。

現在は、健康づくりの啓発、普及支援として、先ほど述べた地域健康づくり員や保健推進員（長野県内では保健補導員、青森県では保健協力員）、協力体制として医療機関（町立千曲病院、佐久総合病院、地元開業医）からの協力を得て町民の健康づくり事業を実施しています。また、地域健康づくり員が中心となり、地域の保健推進員を交えて地域健康学習会を町内をブロックごとに分けて4〜5回程度開催したり、住民の意見を吸い

上げ、保健衛生行政に反映することを目的に健康管理合同会議を年1回実施していることは、当町とは違った形で健康づくりを展開していると思います。

食生活においては、野菜の摂取を啓発するため、食育推進員会による、野菜のたくさん入ったスープのレシピ集を作成して、普及啓発活動を展開したり、「男の料理教室」ということで、

年3回おおよそ60歳以上の单身世帯の男性を対象とした教室を開催しています。これは健康づくりの基本となる食生活を大切にして、人生80年をいきいきと生きるための食の自立を図ることを目的としているようです。

また、健診の結果報告会を各地区の公民館などで実施しており、このことは、当町とは違う取り組みだと思われれます。このようなことから、今回の研修においては、集団健診の先駆けとなったことからわかるように、病院、医師の協力が積極的であること、また、現在においても、地域住民の健康づくりに対する意識が高いことが感じられました。

（佐久市「びんころ地蔵」）

長野県佐久市内にある成田山薬師寺山門にある「びんころ地蔵」



△びんころ地蔵尊前にて

蔵」。これは、長野県で減塩の機運が高まってきた約30年前、長野県で生まれた「びんころり（びんころ）」という言葉があり、「びんぴんで元気に長生きし、病気をせずころりと死ぬ」という意味だそうです。健康長寿にあやかっけて平成15年に建立されたもので高さ1メートルほどのかわいいお地藏様が首をかしげて立っています。1年間に約10万人が参拝に訪れるということ、で、「びんころ」への切望は強いということだと思えます。

（上田市「松山株式会社」）

松山株式会社は、「ニプロ松山（NIPRO）のブランドで、農業機械を製造、農業の近代化・機械化に貢献をしている農業用

作業メーカーです。

この「ニプロ松山」は農家の仕事を楽にしたいという創業者の松山原造が、現在のロータリーの元祖ともいえる土を掘り起こす農具「双用犁」を発明し、製造・販売したことが始まりで、1900（明治33年）年に完成した「双用犁」は、当時としては大変先進的なものということでした。

そして現在も、作物をはぐくむのは「土」、「土を活かす機械づくり」をコンセプトに、農業機械のバイオニアメーカーとして、どのようにすれば土づくりに役立つ農業機械が造れるのかを考え、また、必要とする農家の方々と製品を通して、いかにきめ細かいコミュニケーションを保つか、創業者の松山原造から受け継ぐ「お客様の身になって、お客様が安全に使える、長持ちし、かつ操作が楽な機械をつくる」、人のために、人の役に立つ「使い易さ」を無限に追求する企業精神のもとで農業機械を製造しているということなんです。

平成4年に完成した新本社工場では、最新の自動化ラインを導入して、安定した品質の確保と信頼性の向上、さらにコンピュータ制御により、溶接の速度や電圧など微妙な工程をコントロールしていることを工場生産



△ニプロ松山(株)工場にて視察

ラインを視察しているときに説明を受けました。さらに洗浄や塗装に至る生産ラインのほとんどが自動化されていると話されていました。生産工程の省力化・合理化に貢献するのはもちろんのこと、近年ニーズが高まっている多品種・少量生産への対応や専用溶接マシンを自社開発している点からは、企業精神そのものが伝わってきました。

わが鶴田町も農業を基幹産業としていることで、農業機械の製造現場を直接、視察することは、なかなか出来ないことであり、非常に価値がありました。

以上、簡単ではありますが、常任委員会合同視察研修のご報告とさせていただきます。